

すが  
菅

ぬま  
沼



## 1 集落の概要

### (1) 地名の由来

菅沼の「菅」には、清浄という意味があり、単に菅の生えている沼と考えるのは無理がある。凝灰岩質の土地で、水のきれいなところだからここの地名がついたものと考えられる。

集落の家は、緩傾斜地に散在し大きな沼のあった様子もない。

菅沼という地名は比較的多く、県内各地にも存在する。

### (2) 集落の形成

集落の成立年代は不明であるが、文禄2

(1593)年、「越後国郡絵図」では、

直嶺分菅沼村 中

本 納 5石9斗4升

縄ノ高 9石4斗4升2合

家 2軒 8人

とある。

天和3(1683)年「越後国頸城郡菅沼村御検地水帳」(佐藤稔家蔵)によれば、土地持ちとして庄兵衛・三九郎という2名の名前があり、庄兵衛は5つの屋敷、三九郎は3つの屋敷を持っている。このことから当時の戸数は8戸であったと考えられる。

明治22(1889)年の『新潟県市町村合併誌』によれば、戸数42、人口269とあり、200年の間に戸数・人口ともに増加している。



写真3-108 「慶長2年越後国郡絵図」菅沼村  
(米沢市 上杉博物館蔵)

その後大正から昭和30(1955)年ごろまでは、戸数・人口に大きな動きは見られない。

明治12年、郡制が施行され、東頸城郡菅沼村、明治22年沼木村(菅沼・朴ノ木)、明治34年小黒村(9集落)、昭和30年に現安塚町菅沼となった。

### (3) 地理的環境

『新潟県の地名』(平凡社)によれば、「北流する朴ノ木川左岸の緩傾斜地に位置、北は切越村、南は朴ノ木村。東と西は丘陵尾根が延びる。…(後略)」と表している。

集落は、標高280~340mの朴ノ木川西側の傾斜地に散在、耕地は川を境にして、向山(東山)と裏山(西山)に分かれ、階段状に分布している。

耕作道は、他集落との交流道も兼ね、四方八方に延びていたが、近年の耕作放棄に伴い、その多くは廃道となった。

大正9(1920)年の「村道認定調査及図面」(太田正則家蔵)には、15の路線名と18の枝線名が記入されており、村長あてに提出された控として保管されている。

**幹線道** 大正3年3月「菅沼線開通契約書」(佐藤稔家蔵)が菅沼・切越間で交わされ、幹線道(旧町道)菅沼線が

完成、それまで峠越えであった道が山腹を通るようになった。

(注) この道は村役場への道、浦川原から軽便鉄道を使うときの道であった。生産され出荷される米を雪ぞりにつけて和田まで運んだ重要な路線として昭和49年まで続き、現町道にその役割を引き継いだ。

**現町道** 切越地内経塚峰から、朴ノ木平和橋に至る現町道は、昭和42年着工、8期49年までの工期を経て完成している。

## 2 集落の移り変わり

### (1) 戸数と人口

明治・大正・昭和の前半までは、戸数・人口共に大きな変化がなく、昭和30(1955)年ころから過疎化が進行している。

昭和11年7月調の小黒村々勢一覧には、在籍戸数43、現在戸数37、在籍人口284、現在人口198という2表示がある。籍を残したま

表3-23 戸数と人口の推移

年号	西暦	戸数	人口
慶長2	1597	2	8
天和3	1683	8	-
明治22	1889	42	269
大正9	1920	42	277
昭和11	1936	43	284
昭和30	1955	36	237
昭和40	1965	36	185
昭和50	1975	27	111
昭和60	1985	23	84
平成7	1995	19	58
平成12	2000	14	31
平成15	2003	16	34

注：慶長2年「越後国郡絵図」、天和3年「越後国頸城郡菅沼村御検地水帳」、明治22年『新潟県市町村合併誌』、大正9年『新潟県東頸城郡誌』、昭和11年『新潟県東頸城郡小黒村々勢一覧』、それ以外は役場資料

ま住所を移したり、出稼でかせぎする者の多かったことをうかがわせるものである。

(2) 産業・耕地面積

菅沼は、稲単作地であり、畑作物のほとんどが自給用である。昭和の前半まで雑穀類も主食用として栽培され、稗ひえ、粟あわ、ソバ、大豆、小豆などが作られていた。

耕地面積に大きな変動があったのは、昭和40年代以後である。牛馬に代わって耕運機こううんきが入り、農道の改良が進行するに伴い、耕地が放棄され減少するという皮肉な現象が起こっている。農業所得にのみ依存できない現実がそこにあった。減反政策も耕地の荒廃に拍車をかけていた。

**農業構造改善事業** 昭和41年、政府農林省の方針を受けて、「農業構造改善事業」に着手、「菅沼養蚕組合」を起ちあげた。参加戸数18戸、集落西方の尾根江丸えまるに約7haの桑園と管理舎・飼育舎を造成し、昭和43年から蚕の飼育に入った。43年度の掃立はきたてりょう量は1200gであった（掃立量1gから約4kgの繭まゆを生産）。焼山噴火による降灰、繭価の低迷などの影響を受け、昭和53年組合は解散に至った。

表3-24 耕地面積の推移 (単位：町歩)

年号	西暦	戸数	水田面積	畑面積	合計面積
天和3	1683	8	1.25	0.82	2.07
明治9	1876	-	14.51	4.34	18.85
昭和8	1933	36	31.12	-	-
昭和10	1935	36	31.65	3.93	35.58
昭和30	1955	36	28.00	3.00	31.00
平成15	2003	16	4.25	0.80	5.05

注：天和3年「越後国頸城郡菅沼村御検地水帳」（佐藤稔家蔵）、明治9年『新潟県東頸城郡誌』、昭和8年「米生産統計調査名寄集計簿」（太田正則家蔵）、昭和10年「昭和10年度経済更正計画実行成績調査」（太田家蔵）、昭和30年は集落文書、平成15年は実調査

(3) 用水

**稲平用水** 集落では、「うわせぎ」と呼んだ（上江用水）でいた。

用水に関する古文書には、天保14（1843）年「取替申儀定証文之事」、弘化元（1844）年「稲平用水記」（いずれも佐藤稔家蔵）などがあり、山崩れで不通になったこと、用水開削の由来などが記されている。

なおこの用水は、現在も農業用水として利用されている。水源は豊富な湧水である。

**下江用水** 昭和20年代まで使われていた用水に、下江用水がある。この用水は、朴ノ木川を朴ノ木地内で堰き止めて引いていたものである。集落では「したせぎ」と呼んでいた。

この用水についての古文書は、2通残されている。弘化3年「取極申用水儀定書之事」、嘉永6（1856）年「為取替申再規定証文之事」（いずれも佐藤稔家蔵）であり、用水に関しての取り決めが記載されている。

用水は、朴ノ木→菅沼→切越→小黒集落に至り、菅沼・切越・小黒の農業用水として重要であった。

（注）朴ノ木平和橋から切越経塚峰に至る現町道沿いに下江用水路があったと考えてよい。

**天水田** 菅沼では、上江用水・下江用水を利用することができた水田は、10%くらいである。ほとんどの水田は、山の頂上近くまで作られていて、雨水に頼るか、横井戸を掘って湧水を利用していた。湧水の出口には、横江を作って水を迂回させ、ほんの少し水温を高めてから本田に入れていた。横江には、耐冷性の稗や糯稻ひえもちいねが作られていたのである。朴ノ木川に注ぐ枝川となっている沢水も、貴重な水源であった。

昭和40年代、朴ノ木川からポンプ揚水で約

8 haの水田に灌水かんすいしていたが、長続きはしていない。

#### (4) 生 活

江戸・明治・大正時代は、衣食住のほとんどが自給自足の生活であった。

生活圏は、現在の自動車社会と異なり、直線的距離が重要な要素となっていた。

婚姻関係を見ても、朴ノ木・切越きりこし・伏野ふすの・真萩平まおぎたいら（現安塚町）、高谷・高尾せっこう・切光う・宇津つのまたつ・鷺尾わしお・吉坪よしつほ（現牧村）、谷しんこうじ・真光寺（現浦川原村）など、距離が近ければ、峠を越えての交流が見られる。

小黒とは、お寺を通じての交流があり、和田は村役場の所在地としての生活圏に入る。

明治17（1884）年の「改定戸長役場と所轄区域」では、高谷村（現牧村）の中に菅沼村、朴ノ木村が組み入れられている。

牧村各集落との交流例として残っている資料がある。大正8（1919）年、「岩神・沼木・菅沼線新道路法案に依る郡道編入期成同盟会」（太田正則家蔵）の規約文書には、岩神いわがみ・高尾たかお・朴ノ木うすのき・菅沼すがぬまの重立53名が署名・捺印おもだちして、その共同活動をうかがい知ることができる。

高田（現上越市）へ行くのも、尾根づたいの道を通り、牧村経由であった。

昭和に入り生活圏は、次第に旧小黒村を経て現安塚町に移って行くことになった。

大正12年5月、沼木（菅沼・朴ノ木）地区と、大島村「保倉川電気株式会社」で、「電気工事と電灯の供給に関する契約」（太田正則家蔵）を結んでいる。ランプが電灯に変わったのはこのころである。電気による点灯は、住民にとって画期的な出来事であったと思う。

昭和20年代までは、意識の変化はあっても生活様式にそれほどの変化が見られず、昭和30年代から様々な面での変化が現れ始めた。

当時、池田首相の所得倍増計画を受けて、農業所得だけに頼れず、兼業化が進む一方で、きよかりそん拳家離村に伴う過疎化の始まりであって、生産性の低い山田を持つ山間集落が、この風をまともに受けたのである。

集落から牛馬が消え、耕運機が入る。向山（東山）から引かれていた2本の鉄索てつさく（索道）も消えた。水車小屋もなくなり風景さえも変えていった。耕作道は改良され、機械化で農作業は便利になったが、この風を止めることができなかった。

冠婚葬祭（後述）も簡略化され、ラジオ・テレビの出現で娯楽にも変化をもたらしている。

昭和30年代以後は、戸数・人口・耕作面積・耕作法・生活慣習・行事・娯楽・意識など、様々な面での大転換期であった。

### 3 神社・祭り・行事

#### (1) 神 社

集落の西方、上手くまのじんじやに熊野神社がある。祭神さいしんは、伊邪那美命いざなのみこと、石祠いせには明治39（1906）年11月9日こんりゅう建立とある。

菅沼には、佐藤・吉越・太田という姓があ



写真3-109 熊野神社

るが、<sup>うじがみさま</sup>氏神様がそれぞれ別にあったのかどうかは不明である。

集落では、「お宮さん」と呼んでいる。お宮さんはかつて、子供の遊び場であり、夏休みの宿題をする場でもあった。

## (2) 祭り

4月15日春祭り、9月9日<sup>あまぎけまつ</sup>甘酒祭り、10月28日秋祭り、集落全戸の田植えが終わったところに、「田植節句」の日を決めて祝日としていた。

現在は、甘酒祭りが集落行事として残り、あとは有名無実の状態である。

**甘酒祭り** 熊野神社の祭りを甘酒祭りという。9月9日（昭和30年ころまでは、10月9日であったが、農作業の関係で9月に変更）に決められている。祭神伊邪那美<sup>さいしんいざなみのみこと</sup>命が女神なので甘酒祭りになったらしい。前夜半<sup>ぜんやはん</sup>に各戸で甘酒<sup>ほうのう</sup>を奉納（現在はワンカップが多い）、9日には神主<sup>かんぬし</sup>さんから豊作祈願の祝詞<sup>のりと</sup>をあげてもらい、家内安全のお祓い<sup>はら</sup>を受ける。あとはお決まりの宴会、田舎の素朴なお祭りなのである。昭和の前半までは、嫁ぎ先からの里帰りや親戚を迎え、露店まであって、それはにぎやかであったという。



写真3-110 甘酒祭り (平成15年9月9日)  
(高波重春提供)

## (3) 行事

**盆踊り** 昭和30年代までは、踊りの輪が二重・三重になり、大変にぎやかなものであった。8月7日、15日、16日、17日、27日、28日の6日間、田仕事を休んで盆とっていた。

当時の盆踊りは、「いたこ」と「よいやな」であったが、30年代からは「佐渡おけさ」「山笠音頭」「炭坑節」などが主流になり、平成10年ごろからは、集落から盆踊りも消えてしまった。

**塞の神** 正月15日の行事である（昭和20年ころまでは、旧正月を採用、2月が正月である）。塞の神は、各戸から集められた藁<sup>わら</sup>を積み上げて作られた。頂上には、藁<sup>わら</sup>で作った武者人形<sup>むしゃにんぎょう</sup>を立たせ、焼け落ちるときに倒れる方向で稲作の豊凶を占うもので、南は豊作、北は凶作といった。子供たちは、書初めに「おんべ」をつけ、竹ざおの先に結んで、字が上手になるように祈りながらこの火で燃やしたものである。

**嫁取り** 嫁取りを行事というのもおかし（結婚式）な話だが、あれは完全に行事であった。

現在は神前結婚・仏前結婚などが主流で、披露宴はホテルか料亭でというかたちが多いが、昭和30年ころまでは各自の家で行った。

嫁取りの夜は、集落の若衆が余興に参じ、「春駒<sup>はるこま</sup>」を踊ったのである。他集落にはあまり見受けられない行事なのである。春駒は、女装の男が、お多福の面をつけ、鈴と手ぬぐいを小道具にして踊る。一方、ひょっとこの面をつけたこっけい役が、ササラ竹で拍子をとりながら、面白おかしく踊るのである。踊り手のほかに、三味線引き1名、太鼓打ち1名、笛吹き3名、歌い手1名の8名編成であ



写真3-111 菅沼の山桜

った。村中で見物に出かけ、大変にぎやかであった。

**焼肉大会** 甘酒祭りの前夜祭として恒例になっている。

**そば祭り** 1月下旬ころに日を設定し、みんなでそばを打って食べる。これも近年行事化している。

**お花見** 写真3-111に見られるように、菅沼には山桜の名所がある。これからは、このお花見も行事にしようという動きがある。

## 4 その他

### (1) 「21世紀集落魅力発見事業」のこと

(注)平成12年度から町全体の各集落で取り組んだ。

平成13(2001)年10月、集落の西方尾根江丸まるに山桜(大山桜)30本を植栽、現在自生しているものと合わせて、山桜の名所をもくろむ。

この地は、菅沼養蚕組合の桑園跡地で、山頂にしては広がりのある地形である。木の間から沈む夕日の景観もすばらしい。日が暮れて暗さが増すと、上越市の夜景が現れる。「100

万ドルの夜景」とまでいかなかったも、「10万ドル」くらいになるだろうか。空気が澄んだ日は、佐渡が霞んで見える。

平成15年4月19日、安塚町で開かれた「全国カタクリサミット」では、安塚町のカタクリ群生地として紹介され、多くの人が観察に訪れたのもこの地である。



写真3-112 カタクリの群生

### (2) 集落開発センターのこと

昭和52(1977)年、「菅沼地区集落開発センター」が竣工、安塚町では第1号であり、集落の強い要望で完成したものである。

### (3) 沼木地区防雪体制整備事業のこと

昭和58年、本事業で大型除雪機を3台共同購入、これも事業の初年度であった。この後、

安塚町に小型除雪機が急増することになる。

同59年、菅沼共同車庫がこの事業で建築されている。当時、現在よりも除雪体制が悪く、冬期間の駐車に困っていた。

#### (4) 水車のこと

昭和20年代前半までは、集落に2台の水車があり、共同で利用していた。1台は朴ノ木

川の水を利用し、1台は下江用水の水を利用して動かしていた。

それぞれの水車小屋には、米搗臼が2台、<sup>こめつきうす</sup>藁打用1台、<sup>わらうち</sup>精粉用1台が備え付けられていた。精米用米搗臼には、それぞれ2斗(30kg)の米が入り、約1日で精米になったという。

水車の動力を利用して、<sup>だっこく</sup>脱穀をしたという事例も残されている。

#### (5) 集落図

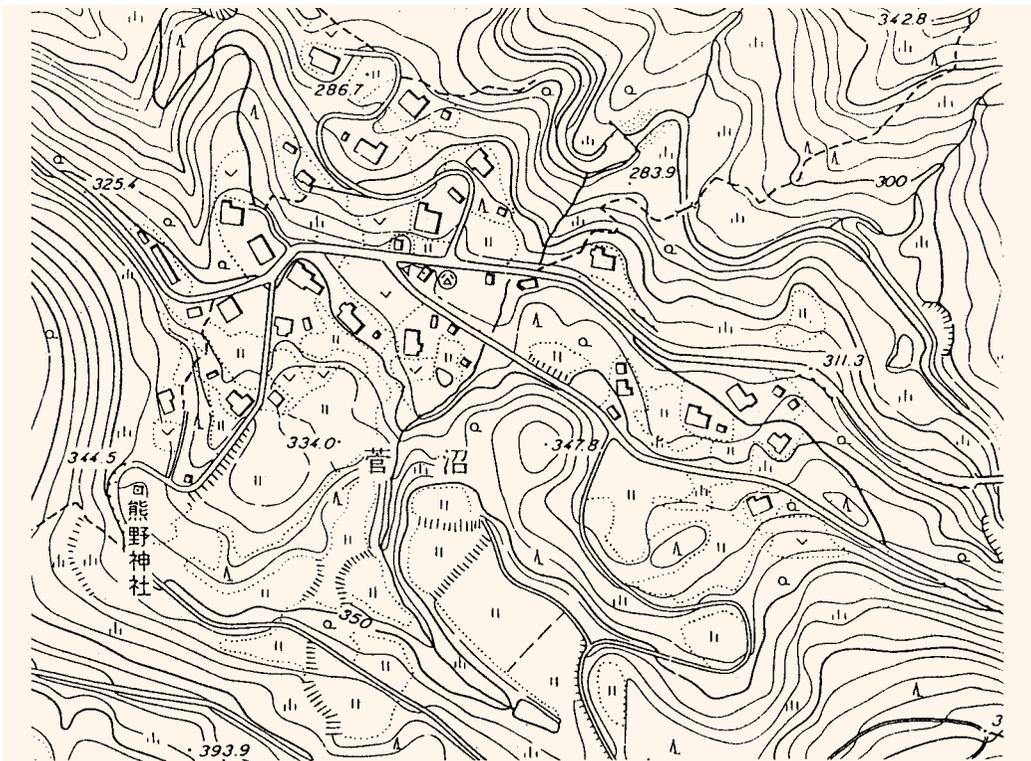


図3-20 大字菅沼集落図